「宗教と社会」学会第7回学術大会
プログラム

日時

1999年6月12日（土）・13日（日）

会場

国際基督教大学本館

〒181 - 8585　東京都三鷹市大沢3 - 10 - 2

参加費等

大会参加費　　3000円（学生2000円）

懇親会費　　5000円（学生3000円）

昼食弁当代　　1000円（6月13日の昼食のみです）

振替をもって参加申し込みとします。（振替用紙はパンフレットに同封）

郵便振替番号：00140 - 8 - 128959
「宗教と社会」学会第7回学術大会事務局
（同封の「振替に関するお願い」を参照して下さい。）

「宗教と社会」学会第7回学術大会本部
〒181-8585 東京都三鷹市大沢3-10-2
国際基督教大学教育研究棟333　宮永研究室
FAX:03-5385-5353
e-mail: miyanaga@icu.ac.jp

国際基督教大学 キリスト教と文化研究所 共催

使用教室一覧

§両日共通§

・受付――――――――――――――――――――――――――――本館1F中央ロビー

※当日は、まず受付においでください。

§一日目§(6月12日　土曜日)

・学会・大会合同本部――――――――――――――――――――――本館2F 201

・休憩所(クローク含む)――――――――――――――――――――――202

・個人発表A会場――――――――――――――――――――――――215

・個人発表B会場――――――――――――――――――――――――213

・キリスト教特別セッションC会場――――――――――――――――203

・総会――――――――――――――――――――――――――――213

・常任委員会――――――――――――――――――――――――――204

・懇親会――――――――――――――ホテルベルモント2F　ルクソール

181 - 0013　三鷹市下連雀3 - 43 - 23

TEL: 0422-71-3330

FAX: 0422-71-3320

§二日目§(6月13日　日曜日)

・学会・大会合同本部――――――――――――――――――――――本館2F 201

・休憩所(クローク含む)――――――――――――――――――――――202

・ワークショップA<グローバル化とアイデンティティ・クライシス>会場――――――――215

・ワークショップB<現代世界の宗教性/霊性>会場――――――――――――――213

・昼食――――――――――――――2Fラウンジ(喫煙可)・202, 214(禁煙)

・常任委員会――――――――――――――――――――――――――204

・編集委員会――――――――――――――――――――――――――205

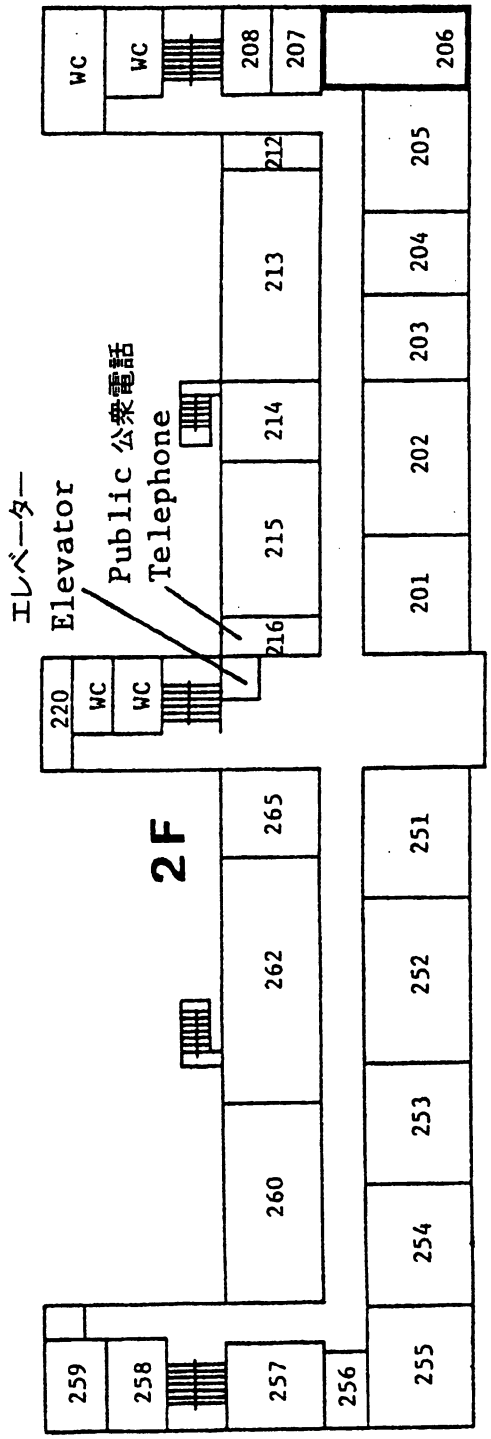
タイムテーブル

6月12日(土)

11:00 ↓	受付(本館1F 中央ロビー)		11:00 ↓ 12:50	常任委員会(204)
	個人発表A会場(215)	**個人発表B会場(213)**		**キリスト教特別セッションC会場(203)**
13:00 ↓ 13:50	岩谷　彩子(京都大学大学院人間環境学研究科) 海を渡る教え ― 「ジプシー」のペンテコステ派キリスト教への改宗をめぐって	岡田　正彦(天理大学) 近代的世界記述と世界感覚 ― 19世紀の日本における世界記述をめぐる言説		川又　俊則(成城大学民俗学研究所) 牧師夫人のライフヒストリー
14:00 ↓ 14:50	櫻井　義秀(北海道大学文学部社会システム科学講座) 東北タイの地域開発と僧侶の実践 ― 開発僧をめぐって	岡尾　将秀(大阪大学大学院人間科学研究科) 天理教における「講」		待井　扶美子(東北大学大学院文学研究科) 日本のキリスト教会における死者儀礼
15:00 ↓ 15:50	大塚　和夫(東京都立大学) 「世俗的」なるものについて ― イスラーム社会研究の立場から	田村　貴紀((財)国際宗教研究所宗教情報リサーチセンター) インターネットが埋め込まれた社会における場の霊性 ― 天理教の事例を中心に		Jennifer White Reding (国際基督教大学大学院比較文化研究科) 「神なきデモクラシー」の危険 ― 1950―52年の日本キリスト教協議会の「家庭生活運動」について
16:00 ↓ 16:50		川田　稔(名古屋大学) 宗教把握における柳田国男と丸山真男		小原　克博(同志社大学) キリスト教と〈個〉
17:00 ↓ 17:50	総会(213)			
19:30 ↓ 21:00	懇親会(ホテルベルモント2F　ルクソール)			

本館/UNIVERSITY HALL

2F



6月13日(日)

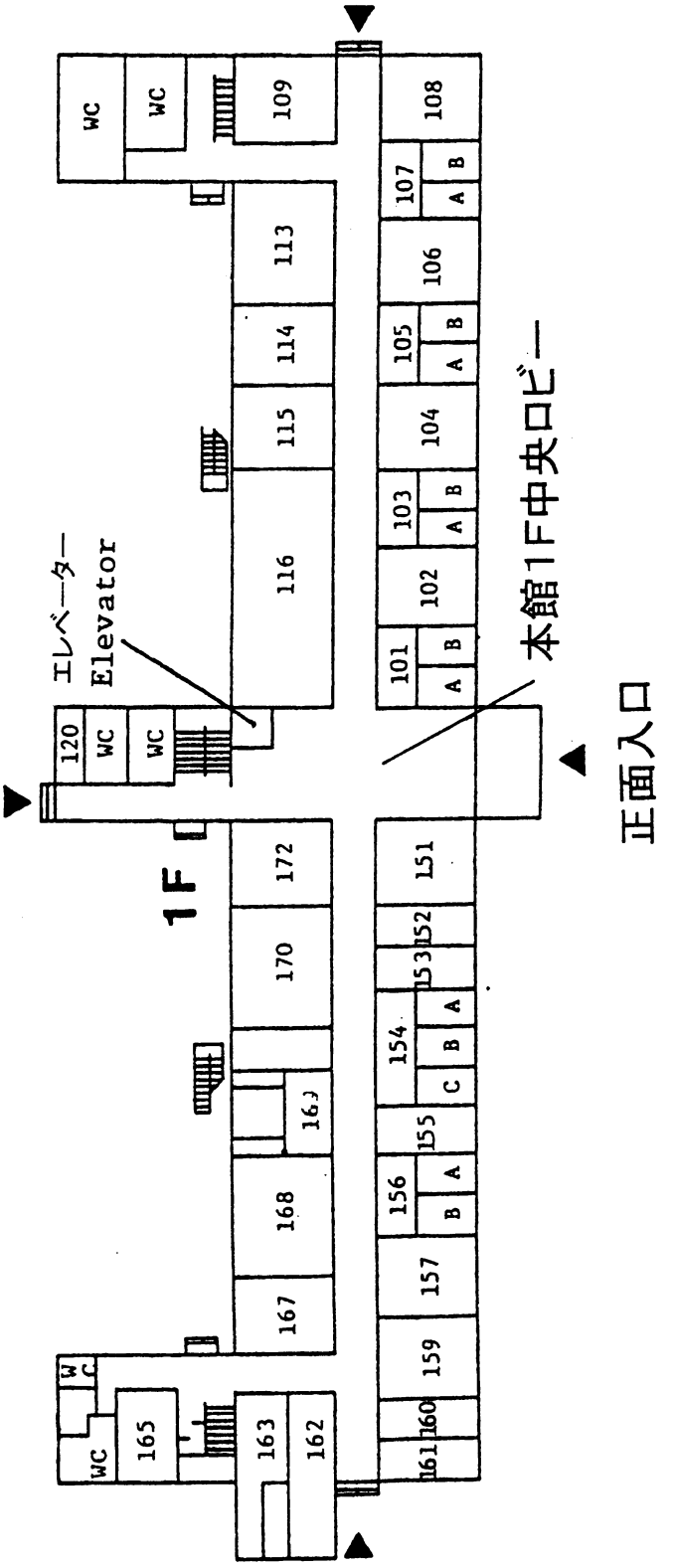
	受付(本館1F 中央ロビー)		
	ワークショップ A 会場(215)	ワークショップ B 会場(213)	
10:00 ↓ 12:00	グローバル化とアイデンティティ・クライシス	現代世界の宗教性／霊性 — 現代宗教研究への課題と展望	
12:00 ↓ 13:30	昼食(2F ラウンジ・202・214)※	常任委員会(204)	編集委員会(205)
	ワークショップ A 会場(215)	ワークショップ B 会場(213)	
13:30 ↓ 16:00	グローバル化とアイデンティティ・クライシス	現代世界の宗教性／霊性 — 現代宗教研究への課題と展望	

※弁当（振替にて申込）は、2F ラウンジにて、昼食券と引き換えでお渡しします。
昼食券は、受付時にお渡しします。

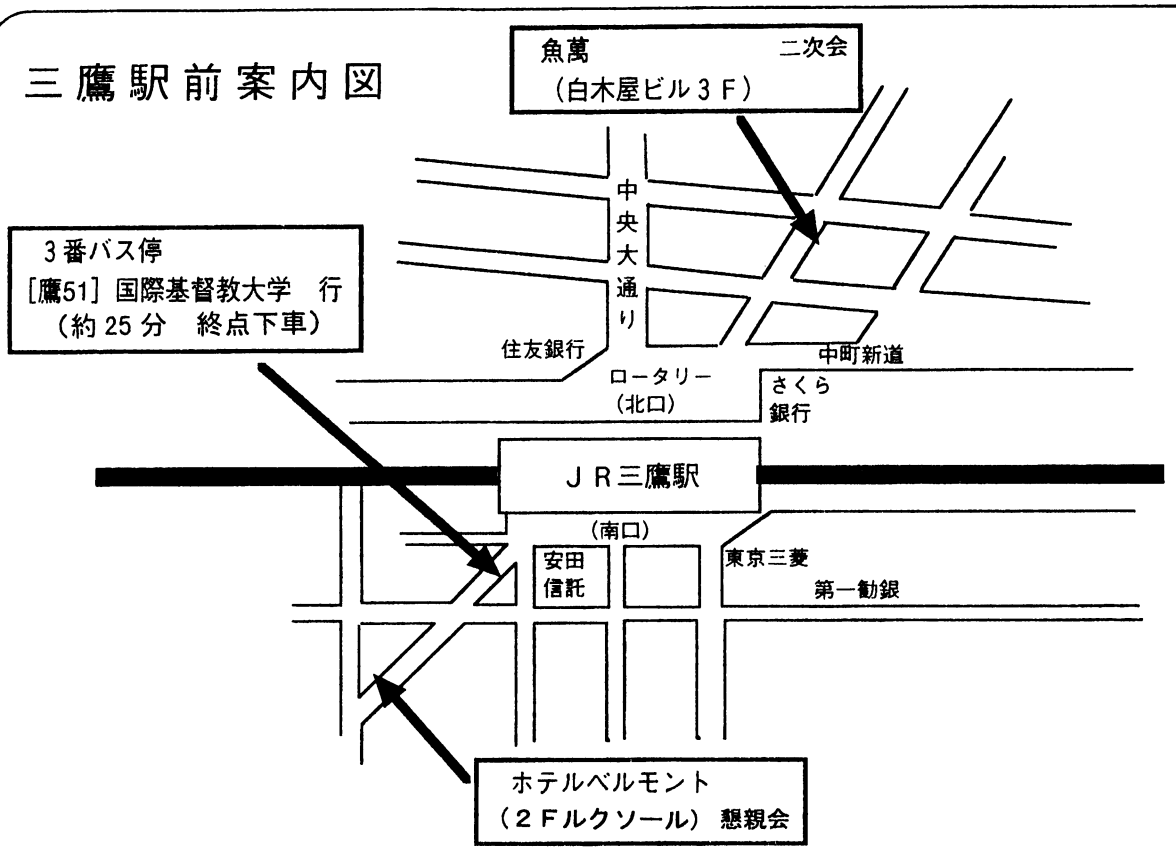
(各研究発表およびワークショップの内容については、同封の「研究発表・ワークショップ要旨」をご参照ください。

本館/UNIVERSITY HALL

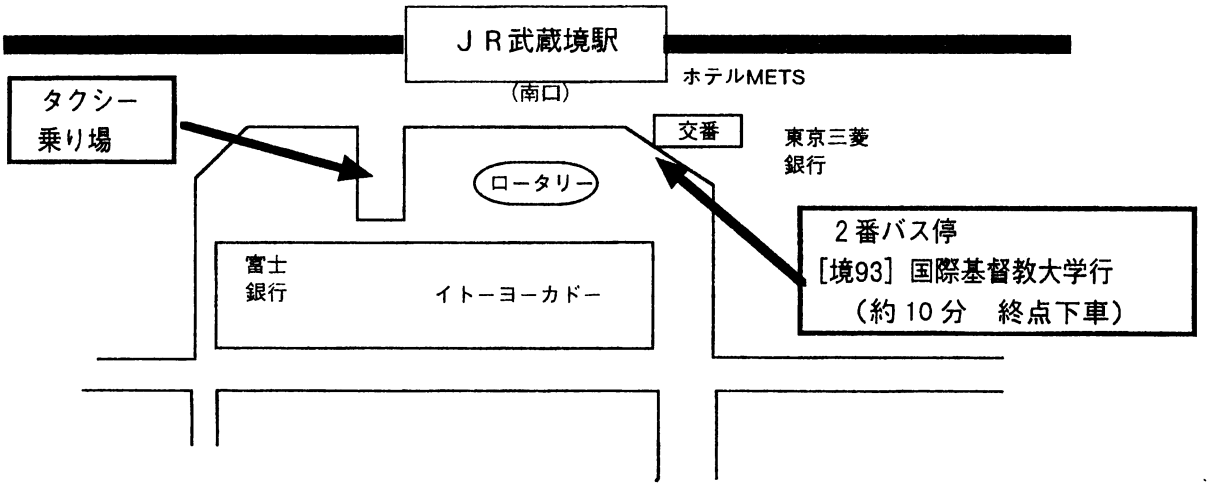
1F



三鷹駅前案内図



武蔵境駅前案内図



注意！　終点で下車してください。国際基督教大学行きバス（JR 三鷹駅南口より鷹 51、武蔵境駅南口より境 93）は、どちらも大学正門前にバス停がありますが、「国際基督教大学入口」というアナウンスがあっても、下車せず、終点でお降り下さい。

小田急バス時刻表

（三鷹駅 ⇔ 国際基督教大学）

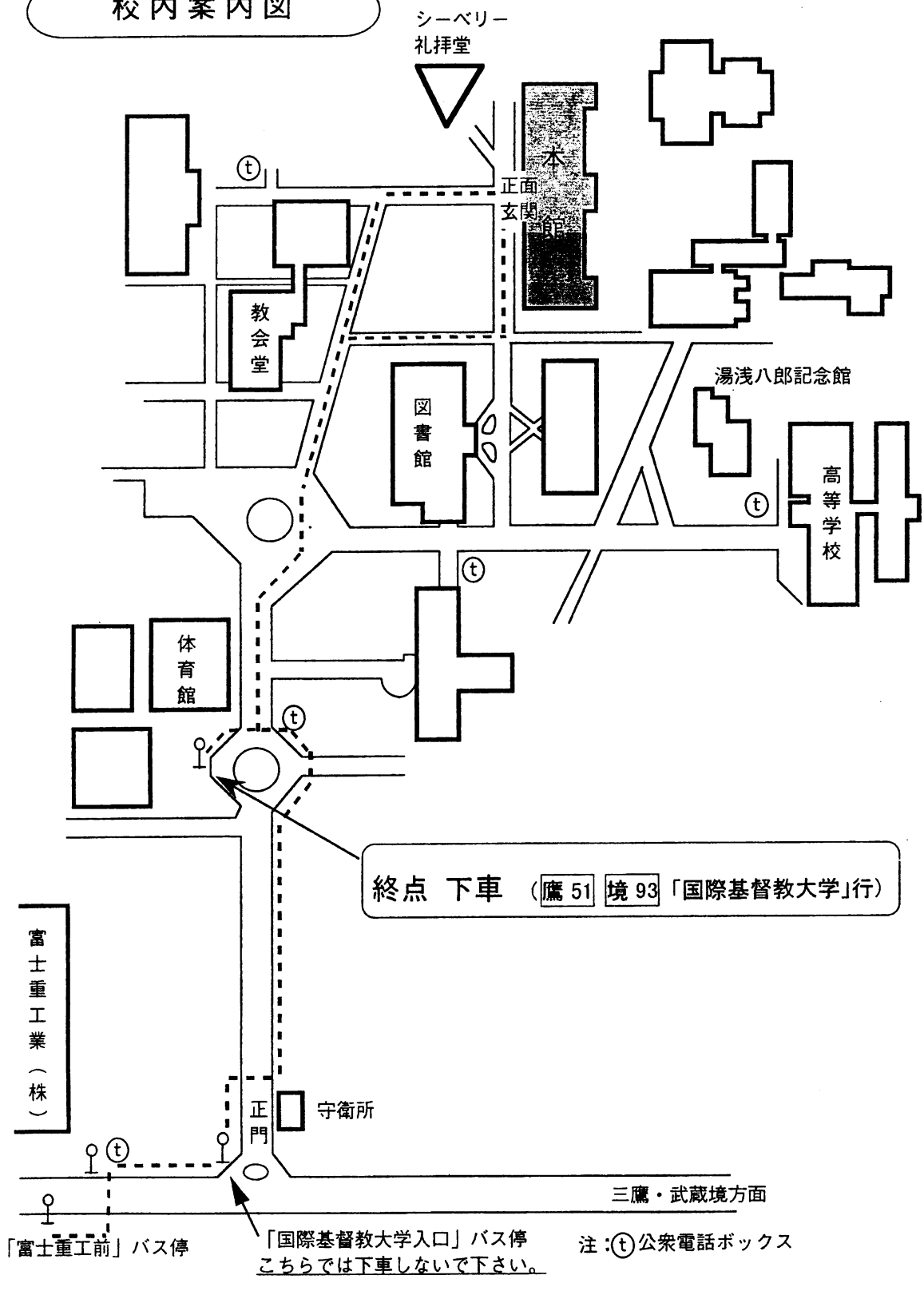
三鷹駅 ⇒ 国際基督教大学			国際基督教大学 ⇒ 三鷹駅	
平　日	土曜・休日		平　日	土曜・休日
57	49 57	6		
03 13 22 27 42 52 57	04 14 28 40 46 56	7	20 30 35 45 49 56	08 20 26 34 49
07 25 35	09 15 22 48	8	00 04 11 14 27 32 37 53	00 06 23 34 39 52
24 40 57	04 32 40 48	9	07	11 27 59
16 40 57	13 28 35 43	10	03 18 35 51	07 14 22 42 51
20 37 57	05 12 37 57	11	26 45	08 26 45
20 37	14 39 52 59	12	06 26 42	08 18 31 52
20	21 36 59	13	06 43	00 15 38 58
00 20 35	15 21 28 53	14	22 43	23 39 52
17 40 59	07 14 21 29 52	15	03 23 46	07 23 30 45
17 35 59	07 16 36	16	03 23 46	04 21 30 44
17 33 38 59	06 22 38 55	17	20 34 42 59	00 16 33 47
11 27 39 55	33 40 57	18	24 39 50	05 18 56
09 23 41 54	18 26 42 50	19	05 19 32 48	10 39 53
10 23 32 43 50	07 15 37 47	20	12 30 45 53	02 17 27 45 57
05 13 33	05 17 33 45	21	03 13 25 42 53	13 25 41 53
41	44	22		06
23 51	40	23	02 44	20
05＊	土曜の２２～２４時は平日時刻にて運行	24		土曜の23時は平日時刻にて運行

＊＝大沢止り

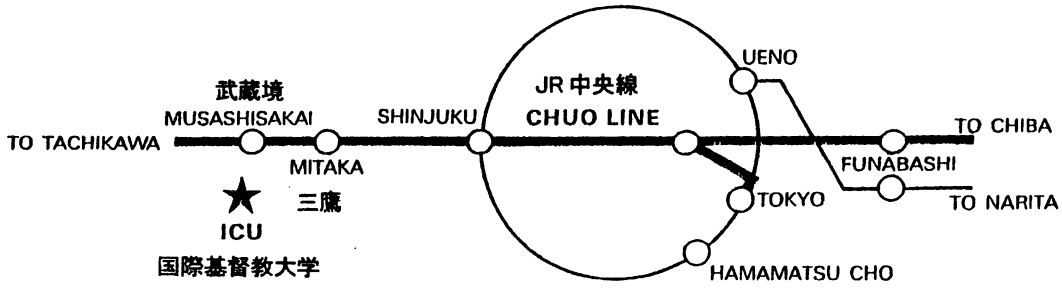
（武蔵境駅 ⇔ 国際基督教大学）

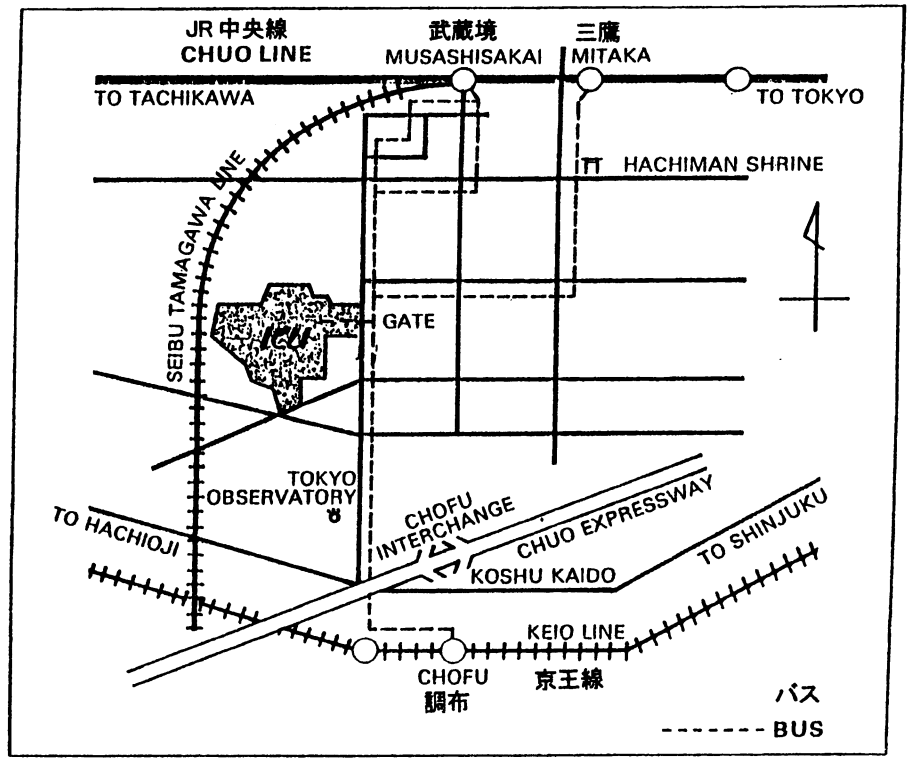
武蔵境駅 ⇒ 国際基督教大学			国際基督教大学 ⇒ 武蔵境駅	
平　日	土曜・休日		平　日	土曜・休日
37	37	6	25 51	25 51
03 32 39	03 29 58	7	18 47 54	17 44
01 08 16 30 37 44 58	27 56	8	16 23 30 44 52	13 42
14 28 43 57	14 30 44 58	9	00 14 29 43 58	00 16 30 44 58
12 26 41 56	12 26 42 54	10	12 27 42	12 28 40 57
10 25 41 55	11 26 55	11	11 27 39 57	12 27 41
11 24 41 55	24 53	12	10 27 40 57	10 39
11 24 40 53	22 50	13	10 26 39 56	08 36
10 23 38 52	05 18 35 47	14	09 24 38 52	04 21 33 51
06 22 35 41 52	05 16 33 45	15	08 21 38 48 56	02 19 31 48
02 10 21 30 39 50	02 14 29 43 58	16	07 16 25 36 45 54	00 15 29 44 58
08 21 37 51	12 27 41	17	07 23 37 51	13 27 42 56
05 19 50	10 39	18	05 19 33	25 54
05 20 35 45	08 37	19	06 21 35 49 59	23 51
02 12 41	04 32	20	27 56	19 51
09 46	08 46	21	29	29
12	12	22	00	00

校内案内図


シーベリー
礼拝堂
本館
正面玄関
教会堂
図書館
湯浅八郎記念館
高等学校
体育館
終点 下車 （鷹51 境93「国際基督教大学」行）
富士重工業（株）
正門
守衛所
三鷹・武蔵境方面
「富士重工前」バス停
「国際基督教大学入口」バス停
こちらでは下車しないで下さい。
注：ⓣ公衆電話ボックス

交通案内図　Directions to ICU





注意！　終点で下車してください。国際基督教大学行きバス(JR 三鷹駅南口より 鷹 51、武蔵境駅南口より 境 93)は、どちらも大学正門前にバス停がありますが、「国際基督教大学入口」というアナウンスがあっても、下車せず、終点でお降り下さい。

「宗教と社会」学会第7回学術大会

（1999年6月12日・13日 国際基督教大学）

個人発表・ワークショップ要旨

5月1日現在の資料にもとづいて作成
大会当日に決定版を配布いたします

個人発表（6月12日）

＜個人発表　A会場（215）＞

●海を渡る教え
——「ジプシー」のペンテコステ派キリスト教への改宗をめぐって

岩谷彩子（京都大学大学院人間環境学研究科）

世界各地に「ジプシー」と呼ばれる人々がいる。その定義はきわめて曖昧で複雑だが、共通していることがいくつかある。その一つが、「宗教をもたない民」として語られてきたことだ。仮に彼らに信仰心があったとしても、それは主流社会の信仰形態の単なる「模倣」でしかない——こうした宗教観が、彼らが移動する先々で接する人々の「ジプシー」認識を規定してきた。また彼ら自身もそれを受け入れる形で自らを語り、一方では様々な形で非「ジプシー」との間に境界を引いてもきた。

ところが、1960 年代以降、彼らの中で自らを「キリスト教徒」の「ジプシー」であると名乗り、従来の自分たちに向けられた宗教観を否定する者が増え始める。こうした運動の先駆けとなったのが、フランスの「ジプシー」の間で 1958 年に設立された、「ジプシー福音宣教会（MET）」の宣教活動であった。この教会は、1960 年代以降移民や第三世界の人々を中心に急速に信者数を拡大しつつある、キリスト教のペンテコステ＝カリスマ運動の流れを汲むものである。そして 1995 年には、「ジプシーの兄弟」がいるとされる、世界 40 カ国に支部を置くほどに成長している。

このようなペンテコステ派キリスト教徒としての「ジプシー」の急増は、「ジプシー」社会の内外に大きな波紋を投げかけた。「ジプシー」の大規模な改宗は、彼らの復

権運動なのか、あるいは従来型の「ジプシー」文化の解体なのか。しかしいずれの見方も、さまざまな異質な要素を自らに抱え込みつつ発展を遂げてきた「ジプシー」社会と、ペンテコステ派キリスト教への改宗のダイナミズムを捉えきれてはいない。

本発表では、以上の問題意識のもとで、フランスとインドの「ジプシー」の間で行われたMETの宣教活動と、両国での改宗の過程を比較・検討する。一つの教会の、地域を異にする宣教活動に着目することで、グローバルな「ジプシー」共同体意識の矛盾とその展開が明らかになるだろう。それと同時にペンテコステ派の原理主義と、宣教先の集団内外に潜在する差異体系との呼応のあり方から、ペンテコステ派キリスト教の超地域的な普及の背景を考察する。また、ペンテコステ派キリスト教という新たな選択軸によって、「ジプシー」集団の枠組が再編成されている点についても言及したい。

●東北タイの地域開発と僧侶の実践 —— 開発僧をめぐって

櫻井義秀（北海道大学文学部社会システム科学講座）

本報告で取り上げる開発僧とは、地域開発に従事する僧侶の意味であり、瞑想修行による心の開発（悪癖を捨てる）、地域の経済・福祉的事業（米銀行・水牛銀行、貯金組合の設置、託児施設・奨学金給付等の事業）を行っている。現在のタイにおいてオルターナティブな開発、社会開発のキー・パーソンと多くの論者が評価し、地域開発に果たす僧侶の役割、活動の調査研究、評価が、実践的な開発論のみならず、実証的地域研究者においても重要なトピックになっている。

つまり、開発論のコンテキストでは、経済開発から社会開発・人間開発へ重心が変わり、地域住民は開発の対象から開発の主体へと位置づけられた。参加型開発、地域資源の有効利用（人的資源としてのキーパーソン、自然資源としての生態系との共生、土着の知恵としての伝統文化、技術の利用等）が開発の戦略であり、開発過程における住民のエンパワーメントが目的でもある。タイ社会の伝統、コミュニティに根ざした内発的発展を仏教僧侶が立ち上げたものとして、研究者が着目する。

今回は、「開発僧」の問題を、彼らのオルターナティブな思想性、開発実践論の紹介、評価をなすというより、社会開発に僧侶が関わる社会的コンテキストをもう一度大づかみにまとめてみたい。開発主義・政策と上座部仏教サンガ組織の関わり、ＮＧＯ活動と地域僧侶の関わり、地域の農村部仏教と住民の宗教的関係等が、「開発僧」をめぐる議論の中に、複雑に重なり合っており、この問題をときほぐすことによって、タイ社会近代化に果たした上座部仏教の役割が歴史的に確定され、開発実践論として、僧侶の役割、その可能性と限界もまた明確になりうるのではないかと考えている。

（個人発表企画趣意書より転載）

●「世俗的」なるものについて —— イスラーム社会研究の視点から

大塚和夫（東京都立大学）

＜発表のねらい＞

1970年代以降の宗教復興の潮流により、それまで自明のものとされていた世俗化論は、否定とまではいかなくとも、大きな疑問符をつけられることとなった。そのような宗教復興の代表例の一つ、イスラーム社会を私は調査・研究しているが、近年のイスラーム復興現象などは、「前近代」的イスラームの単純な復活ではなく、むしろある種の近代化（世俗化）経験を経たうえで、改めて「発明された伝統」としてのイスラームの隆盛と考えている。そしてその中には、ある種の「世俗的」要素が含まれているように思われる。

このような問題意識をより一般的な形で明らかにするために、大会発表では「世俗的」なるものの概念の再検討を行ないたい。具体的には、かつての近代化論＝世俗化論図式の中では一つのセットとして扱われがちであった、「世俗的」なるものを構成するいくつかの要素を弁別し、それぞれを改めて検討するという形をとる。

なお、この発表の粗筋は、昨年、主にイスラーム地域研究者の集まる研究会で簡単に発表し、その一部は活字にもした（拙稿「イスラーム世界と『世俗化』」『季刊民族学』85、1998 ＜配布資料＞）。ここではそれに補足を加え、より一般的な議論に編成替えをして発表する。そして、イスラーム研究者に限定されず、広く「宗教と社会」の関係を研究している本学会の会員諸氏からの忌憚ない批判をいただき、論旨をより洗練させたい。

＜発表の構成＞

Ⅰ．「世俗化」「世俗的」の原義の確認と諸要素の抽出

Ⅱ．「世俗的」なるものの要素分析

1．政教分離という要素

2．社会生活に占める宗教領域の減少という要素

3．現世志向という要素

Ⅲ．　論点

1．比較宗教・文化論と「近代化」の歴史人類学

2．宗教の「世俗化」と「みえない宗教」としてのエスニシティ、ナショナリズム

3．経験としての世俗化と「近代的」現象としての宗教復興

＜個人発表　B 会場(213)＞

●近代的世界記述と世界感覚
—— 19 世紀の日本における世界記述をめぐる言説

岡田正彦（天理大学）

近代科学が伝統的な価値観に対してもたらした、さまざまなインパクトのなかでも、天文学上の新しい発見や理論の展開は、とくに衝撃的なものであった。近世の日本においても、とくに地球説と地動説に関する理論は、固定した、平らな世界像に慣れ親しんできた人々のあいだで物議を醸すことになる。こうした状況のもとで、近代科学的な世界像に触発された議論が広く展開された。とくに 19 世紀の初頭にかけては、山片幡桃の「夢の代」、佐藤信淵の「天柱記」、司馬江漢の「和蘭天説」、普門円通の「仏国暦象編」といった、多様な思想伝統を背景としながらも、従来とは異なる世界像を描き出す新しい言説が、儒学・国学・洋学・仏教など、様々な分野において登場してくる。世界観を重視する従来の思想史では、これらの作品の持つ共通性よりも、それぞれの独自性が強調されがちであった。たしかに、個々の世界記述の背景にある世界観は、丸い地球と平らな世界との違いに代表されるように、同一のものではない。しかし、それぞれの世界像を描き出すために用いられる言説は、多くの共通点を持っている。このため、著者の意図の所在とは別に、それぞれの世界像が持つ性質は非常に似通ったものになっているのである。いま試みに、これらの作品に共通する世界記述の様式を考察するなら、1）客観的な方法によって説明可能なシステムとしての世界の記述、2）現実に存在する世界の写実的な模写と視覚化、3）システムの説明の客観性と世界の表象の写実性を主張するために数学的な論証が用いられていること、などが挙げられるであろう。こうしたスタイルによって記述される世界は、それが球状であっても平面であっても、客観的に説明可能なシステムとして可視化できる領域を強調せざるを得ない。ここに於いて、見える世界と見えない世界を分断する世界感覚が生じてくることになる。世界観の内容ではなく、世界記述をめぐる言説に焦点を置くことによって、従来の思想史においては問題化されてこなかった、世界感覚の変化を論じることが出来るのではないか。ここでは、「叙述された内容」ではなく「叙述形式の内容」を問題化し、「形式のイデオロギー」を問うヘイドン・ホワイトの思想史の方法論を援用しながら、どのような世界観が時代のヘゲモニーとして作用してきたかではなく、どのような記述方法が、世界の性質を形作ってきたかを問題化してみたい。

●天理教における「講」

岡尾将秀（大阪大学大学院人間科学研究科）

天理教は、教祖とされる中山みきという人物によって創始されたといえる。彼女は天理教の教義の素材となっている言葉を発し、歌舞を伴う儀礼を実施しつつ作っていったからである。しかし、天理教が全国各地に活動の拠点を擁するようになるには、みきに接した人たちが彼女の身体を社としているとみなされた神への祈願を知人に進めるだけでなく、参拝や日々の儀礼を指導しながら、神による人間創造を前提とする救済の理由を説教していく必要があった。と同時に、みきの神に祈願した人々は、当人や親族の病気の回復の経験を通して、みきの神による救済を実感し、自らも儀礼を実施しながら、信仰次第であらゆる救済が実現する理由に納得していく必要があった。したがって、同じみきの神への信仰でも、活動の詳細は、それを伝える人と受け入れる人の性格や生活事情に応じて、様々な程度と様式で行われた。しかし、詳細には多様な活動も、同じ神への信仰を目的とする以上、儀礼や説教の効率を高めるため、それぞれの地域において人並み以上に活動に貢献している人物を軸に、ある程度統一されたものへとまとめられていく必要があった。そうした活動の単位は、教祖がいまだ存命であった時代においては、大抵、百姓や職人など、生業をもった通常の生活を営む人々によって担われ、講と呼ばれた。この講の運営がどのような協力、指導によって可能となったかを考えながら、そのいくつかのタイプを伝道についての伝承の記録に見出していきたい。

（個人発表企画趣意書より転載）

●インターネットが埋め込まれた社会における場の霊性
—— 天理教の事例を中心に

田村貴紀（（財）国際宗教研究所宗教情報リサーチセンター）

かつてコンピューターを使用することは、我々を他人との関係から遠ざけるものだった。しかし、今日では、我々をニュース、音楽、アート、商取引、心理セラピー、セルフヘルプグループ、市民活動へ誘う。つまり、人々の関係の中心へと導いていく。世界的なインターネット文化論の主流は、従来のように「仮想世界」対「現実」という二項対立でインターネットの社会的な意味を考えるものから、インターネットが埋め込まれた社会として現実を認識する、というスタンスに変わっている。

この近代化の一つの結末ともいえる事態は、宗教とも関係を持ってくる。事態の進展している英語圏からは、ニューエイジの儀式や、インターネット上のキリスト教コミュニティについての論文やレポートが発信されている。

しかし、そのような研究の中では、もっぱら言葉によるコミュニケーションによる宗教行為が取り上げられている。言葉を中心とするコミュニティについての議論である。本報告では、インターネット利用に積極的であり、おぢばのある本部の画像をほぼ同時的にインターネット上で放映している天理教の例を中心的に取り上げ、英米での研究では取り上げられない、インターネットが埋め込まれた社会における「場」の霊性について考える。

（個人発表企画趣意書より転載）

●宗教把握における柳田国男と丸山真男

川田稔（名古屋大学）

柳田国男の学問においては、よく知られているように、氏神信仰論が中核的な位置をしめている。しかし意外なことに、これまで柳田の氏神信仰論の全体像について、まとまったかたちで検討したものはほとんどみあたらない。

その理由はいろいろ考えられるが、ひとつには、現実の氏神信仰そのものについて、戦後社会科学を代表する一人である丸山真男をはじめ多くの批判があったことと関連している。すなわち氏神信仰は国家神道と直接つながるものであり、近代天皇制的な国家体制をささえるもっとも原基的な要素であるとされてきた。そしてそのような観点から、氏神信仰の意味を重視する柳田の研究もこれまであまり評価されなかったのである。

しかし柳田の氏神信仰研究の一つのモチーフはむしろ国家神道批判にあった。その氏神信仰研究の直接の目的は、日本人の価値観や生の内面的な意味づけを明らかにすることにあったが、さらに人々の内面的な信仰である氏神信仰を、国家神道から切りはなすというところにもねらいがおかれていた。

また、しばしば日本人の文化は外面的な品位を重視する文化であり、その倫理意識は外面的なものだといわれている。他者にどう思われるかを重視する、その意味で内面性の欠如した倫理だと。丸山真男や大塚久雄などもそのように見ていたようである。

これにたいして柳田は、日本人の倫理意識も内面的な信仰にささえられているものであって、けっして外面的なものとばかりはいえないとみていた。たしかに、柳田自身そこにおいて内面的な原理性、固有の内発的な規範力が相対的に弱いことは認識していた。しかしその核には個々人の信仰が存在しており、人々の倫理意識も基本的にはそれを基礎にした内面的な性格をもつものだととらえていたのである。

本報告は、そのような日本人の宗教意識をめぐる柳田国男と丸山真男の議論をとりあげ、その相違の背景にある、宗教把握における両者の方法的な基礎を検討しようとするものである。（個人発表企画趣意書より転載）

<個人発表　キリスト教特別セッション　C会場(203)>

●牧師夫人のライフヒストリー

川又俊則（成城大学民俗学研究所）

現代日本のプロテスタント・キリスト教会で調査を進めてきた発表者は、各教会において、牧師が重要な位置を占めているのはもちろんのこと、牧師夫人の存在も各教会ごとに違いはあるものの、かなり重要であることを常々感じていた。また、一方で宗教研究において「ライフヒストリー」を用いた研究の重要性を幾つかの機会に指摘していたが、自らの事例報告はあまりしてこなかった。今回の発表では、数名の牧師夫人の口述生活史・自分史をもとに、個人史・教会史・社会史の交錯する部分を考察していきたい。そして、死者儀礼・信徒周辺に続く研究視座を提示して、「キリスト教受容」研究をさらに深めていこうと思う。

（個人発表企画趣意書より転載）

●日本のキリスト教会における死者儀礼

待井　扶美子（東北大学大学院文学研究科）

これまで、「偶像崇拝」の危険性から、日本のキリスト教会の「死者への対応」に関して、ほとんど表立った議論などはなされてこなかった。そのため、個別の教派や教会で模索され、実践されてきた様々な工夫や妥協策について、いくつかの教派を網羅した形で真っ向から扱った研究は皆無であったと言っても過言ではない。

本発表では、日本カトリック教会、日本聖公会、ルーテル教会、日本基督教団の4つの教派に属する教会で実施したフィールドワークのデータをもとに、キリスト教会における死者儀礼の現状を報告し、「日本におけるキリスト教の受容と適応」という大きな問題を考察するための1つの手がかりを提示する。この4つの教派はいずれも、カトリックの第2バチカン公会議(1960年代)以降、教会の祭式の手引書ともなっている儀式書・祈祷書・式文において、特に葬儀の項目の見直しをはかり、在来の葬儀慣行との接点を見出す努力を続けてきた教派である。

日本人の生活に深く根づいている盆や彼岸などの行事や、「救済論」との関わりからキリスト教会の儀式の中から排除される傾向にあった未信者の葬儀や死後の救済などは、従来、「偶像崇拝的」とみなされ、正式な教会の儀式の中で扱うことは難しいとされてきた一方で、「クリスチャンホームが少ない」という牧

会(司牧)の現場の中で、無視することのできない問題でもあった。日々の宗教活動における架け橋としての役割を果している牧師・神父からの聞き取り調査を進めていくなかで、これらの「偶像崇拝的」とみなされがちであった要素を教会の正式な儀式の中に位置づけて行く際に、彼らが教派の相違を超えて決まって用いる対処法として、以下の5つのパターンを見出すことができた。

1. クリスチャン独特の代替表現の使用
2. キリスト教の脱文化的性質の主張
3. 神の完全性に対する信頼
4. 聖書による再解釈
5. 聖職者の権威の行使

牧師・神父たちは、これら5つの対処法を実際にどのような場面で用い、在来の葬儀慣行との接点を見出してきたのかという点について、フィールドワークで集積した事例を提示しながら報告する。

●「神なきデモクラシー」の危険

—— 1950-52年の日本キリスト教協議会の「家庭生活運動」について

ジェニファー・ホワイト・レディング
(国際基督教大学大学院比較文化研究科)

この発表では、1950年から1952年にかけて日本キリスト教協議会の「家庭生活運動」の発展について検討する。特に、中国で同じような運動を20年指導した経験をもって、この運動を設立したアーマ・ハイボーというアメリカ人メソディスト宣教師について考察する。民主主義社会の実現のためには、「愛と尊敬に基づいた結婚」が必要であるという考え方を示すために、彼女の1950年から53年のスピーチや論文を検討する。しかし、「民主主義」や「平等」という進歩的な響きのある言葉をよく利用したハイボーやほかの指導者が、実際には結婚や「家庭生活」について保守的な考えを持っていたということを主張したい。

アメリカ占領時代についてのカワイ・カズオの研究によれば、当時の多くのアメリカ人が「民主主義=アメリカ的な生活」というように考えていた。この解釈がマッカーサーやハイボーにとっての「民主主義」にどの程度適用できるかということを論じる。特に、日本全国で行われた六週間にわたって「家庭生活研究講習会」という会議で使われた資料を検討する。マッカーサーが日本で民主主義を実現するため、キリスト教やその宣教師が必要と個人的に考えたことが、ＳＣＡＰの宣教師に対する政策にどのような影響を与えたかということも述べる。このような民主主義を実現するためキリスト教が必要というマッカーサーの考え方に、家庭生活運動のイデオロギーが対応したようである。

1950 年と 1951 年全国協議会の公表では、新しい民主主義のもとで展開した社会変化のペースが早すぎ、かつラディカルすぎたという意見が見られる。これは、特に「新憲法の下に旧来の家族制度は崩壊して、急激なる変化をもたらしたが、民主的生活に対する訓練を欠いていたため、家庭道徳の頽廃その極に達したものである。」という決議文に明らかである。「健全な小説」などを出版する計画も、戦争直後の性道徳の無秩序化ともいえる「カストリ文化」への反応であったという解釈もできる。つまり、彼らはキリスト教宣教のみが無政府社会に対する解毒剤となると考えてきた。この運動によって推進された理想家庭生活は、「神なきデモクラシー」が無政府社会に過ぎないというハイボーやほかの指導者の保守的な考えに基づいていたことを、この発表では強調したい。

●キリスト教と〈個〉

小原克博（同志社大学）

〈個〉という概念の成立は、西欧のキリスト教思想史と深い関係がある。単なる個人主義思想では汲み尽くすことのできない〈個〉の概念の重層性を理解するために、〈個〉を共同体との相関関係を軸にして考察する。

Ⅰ　キリスト教における〈個〉の形成過程

1）ヘブライズムにおける〈個〉と共同体

ヘブライ的人間観においては、〈個〉と共同体とは一体不可分の関係にあった（「集合的人格」）。たとえば、アダムやイスラエルといった名は、個人と同時に共同体を指し示している。また、〈個〉と共同体の緊密な関係は共時的にのみならず、世代のつながりにおいて通時的にも見られる。

2）イエスにおける〈個〉と共同体

地中海世界においては、家族集団と政治集団が圧倒的な（そして抑圧的な）規範力を持っていた。イエスは、それを根底から解体するような痛烈な批判を投げかけた。結果的に、集団的束縛から〈個〉の解放を強く促すようになったが、ギリシア・ローマ世界のキュニコス主義者とは異なり、「共食」に見られるような共同行為をも重視した。

3）キリスト教思想における〈個〉の形成

三位一体論の形成を通じて〈個〉の概念が整備されていった。

Ⅱ　現代神学における〈個〉と共同体

1）現代神学における共同体の意義

ラテン・アメリカ解放の神学、黒人解放の神学、フェミニスト神

学、エコロジーの神学など現代神学の諸潮流においては、個人主義的信仰の硬直性を批判し、共同体的な交わりの中に信仰の基盤を見いだそうとしている。

2）日本（アジア）における欧米的〈個〉の受容

欧米の宣教師たちは祖先崇拝を前近代的なものと見なし、それを近代的個人主義によって置き換えようと試みたが、その受容史を問うべき時に来ている。

Ⅲ　〈個〉と終末論

〈個〉を拘束する、終わりのない循環的日常を断ち切りたいという願望が、終末思想における外的力の強制的介入を求める。カルト宗教と千年王国運動の結びつき。

（個人発表企画趣意書より転載）

ワークショップ(6月13日)

＜ワークショップ　A会場(215)＞

● グローバル化とアイデンティティ・クライシス

● 要旨

グローバル化においては、基本的に、経済のレベルでの世界統合と、国民国家という政治レベルでの、反統合が併存している。しかも、国民国家は、国民の文化的アイデンティティを正当性の根拠としているために、地域の伝統文化が、国家成立の根拠として、本質的な役割を担って登場する。ところがさらに、反統合や、分離のベクトルをアイデンティティとする集団も、世界経済への積極的な参入なしには、繁栄はおろか、存続さえも危うい。このような複雑な状況のなかでは、例えば政治のレベルでは、従来の「保守」「革新」を含め、明快な政治区分の選択によるアイデンティティは、意味を失う。また、企業は、グローバル経済への参入を必然とするが、同時に、国民国家を政治のパートナーとし、地域の文化にも関わらなくてはならない。これらを抱え込む複雑な企業文化に、忠実に帰属する自己はまた、必然的に複雑であり、統一が難しい。さらに、このような企業人が父であり、夫である家庭もまた、単純明快な同質性を作り出すことが、困難である。このような家庭にあっては、互いに親密であることは和を作り出すよりも、むしろ心理的に傷つくことが、現実的には多い。しかし、この、親密さ、という価値を理想化するのも、グローバル化の結果である。このような、企業人とその家族の問題性は、ふだんは表にあらわれることはない。しかし、突然の海外派遣やリストラなどによって引き起こされる家庭内の問題は、じつは、グローバル化という世界状況のなかで日常化された、アイデンティティ構築の難しさに原因がある。それが、個々の出来事をつうじて、アイデンティティ・クライシスとして経験されるのである。そのように考えれば、例えば、日本における「癒し」の希求という社会現象は、現代世界のマクロの大状況（グローバル化）を、映し出すミクロの現実ということができる。

このワークショップは、五人の発表者による個別事例の提示に始まり、あくまでも具体的な事例の分析、検討に焦点を当てることによって、現代世界の一般的な社会現象であるアイデンティティ・クライシスの実態を探り、それがどのように、宗教運動や宗教の希求となって出現するのかを、追究しようとするものである。

● 構成

司会、発題、コメント

孝本貢、望月哲也、山中弘

発表

1 宮永國子　日本の新宗教を中心に
2 樫村愛子　日本の精神世界運動を中心に
3 近藤光博　ヒンドゥー教の動向を中心に
4 矢野秀武　タイ仏教の動向を中心に
5 石橋 純　ベネズエラの宗教動向を中心に

個々の発表者のレジュメは当日配布のプログラムに掲載。資料、発表原稿等は会場にて配布。

＜ワークショップ B会場(213)＞

● 現代世界の宗教性/霊性 —— 現代宗教研究への課題と展望

● 要旨

本ワークショップの目的は、伝統的な宗教性に対置される新しい宗教性/霊性ー 20 世紀の後半から主に先進資本主義諸国を中心に広がりつつあるそれーについて究明し、今後の宗教研究における重点的課題を明確にしていくことである。「現代世界と現代人の意識を理解する手がかり」を理論・事例両面で広範囲に求めて議論を展開していきたい。

より具体的には、 1)「ニューエイジ」等と呼ばれる汎神論的な世界観の広がりとその非制度的な形態、 2) 既成[新]宗教内部でも起こりつつある新しい霊性へのめざめなど、現代世界で同時多発的に進展している現代的な宗教性/霊性のあり方を包括的に把握する試みを示すことになる。われわれは、これらを思想内容や組織形態などで類型化・整理したり、その「新しさ」を強調することよりも、それを超えて、新しい宗教性/霊性を捉えようとする努力を通じた宗教研究方法論へのフィードバックに重きを置いている。

第1回目となる本ワークショップでは、 以下の二つの視点から検討を行なう予定である。

1） 参加者やクライエントに焦点を置き、彼らが教団／組織／ネットワークとどのように接したり、教義を解釈したりしているのか、つまり組織の内外での具体的な宗教性/霊性を見ることによって、現代的宗教性/霊性の構図を浮かびあがらせる。これにより、[新]宗教教団を実体化し所与のものとした従来の宗教研究に新しい枠組みを提出する。

実体化し所与のものとした従来の宗教研究に新しい枠組みを提出する。教団的なもの、非教団的なもの、その中間を事例として取り上げ、検討することになろう。

2） 20 世紀の宗教学、宗教社会学の総括－より具体的には、現代的な宗教性/霊性をより的確に把握するため、これまでの類型論や先行研究の総括を行い、その限界を指摘するとともに、新しい宗教性/霊性を捉えるための展望を提示する。

本ワークショップは、従来の個別研究では捉えにくかった以上のような課題を、思考横断的に理解していくことを試みるものである。私たちはそのための集中的な討議の場をすでに継続的にもっており、これを母体にワークショップを継続する意向もある。また、ワークショップを契機に継続的な共同研究の立ち上げも計画している。

● 構成

午前の部

10：00－10：10 主旨説明

10：10－10：30 大谷栄一 20 世紀日本の宗教研究の再検討
——「現代世界の宗教性 / 霊性」研究の射程

10：35－10：55 小池 靖 セラピー文化とニューエイジ
—— 下位文化研究の視点から

11：00－11：55 全体討論(A)

午後の部

1：30－1：50 事例 1 芳賀 学 消費社会における教化活動の変容
—— 特に、教化者に注目して

1：55－2：15 事例 2 葛西賢太 Spirituality of Recovery
—— Recovery Movements とその展開

2：20－2：40 事例 3 弓山達也 ニューエイジと救済宗教との間

2：40－2：55 休憩

2：55－4：40 全体討論(B) コメント：伊藤雅之 樫尾直樹

本ワークショップの報告内容の詳細（報告レジュメの評価版など）、および今後の計画については、以下のウェブサイトに掲示されることになっている。当日参加される方々に目を通していただければありがたい。

http://www.juen.ac.jp/shakai/kkasai/religion/nrcs/